

バトンを受け継ぐ

奨励	中村 信博【なかむら・のぶひろ】
奨励者紹介	同志社女子大学学芸学部長 同志社女子大学学芸学部教授 日本キリスト教団牧師

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。
また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」

(マタイによる福音書 13章44―46節)

神にささげられた学校

今年も間もなく11月29日、同志社創立記念日を迎えるようとしています。143年前のその日、朝8時であったと伝えられています。新島襄はまず自宅で祈禱会を開きました。新島とともに同志社最初の教師となったジェローム・デイヴィス宣教師と6名の生徒がこの祈りに加わりました。デイヴィスは「あの朝開校に先立って新島が自宅で捧げたあのやさしい、涙にみちた、まじめな祈りを私は決して忘れることはできない。すべての者が心から祈った」(デイヴィス著 北垣宗治訳 『新島襄の生涯』 同志社校友会 1975年)と書き残しています。それは、教師がふたり、そして生徒はわずかに8名という、まるで私塾のような小さな学校が、日本、そして京都という異教社会において、神にささげられた瞬間でありました。以来、同志社はここにちに至る長い歴史を、キリスト教を建学の精神、またその礎として歩んできたのです。

ただ、143年前の創立者による「やさしい、涙にみちた、まじめな祈り」については、幸いにその場に居合わせたデイヴィスの証言によって辿り返すことができます。私自身、これまでも幾度となく教室や女子大学の礼拝などでもこうした同志社創立期のエピソードを紹介し、創立者新島襄の志と建学の精神について説明してきたつもりです。しかし、いっぽうで143年後の現在、同志社に学び、同志社に働く私たちにとりまして、このときの創立者の祈りとそれが現在の私たちの大学においてもつ意味を伝え、その関係を考えつづけることはそれほどたやすいことではありません。キリスト教を建学の精神とする大学において、真理と出会い、学術と専門知を学ぼうとすることと、この創立の朝の祈りとはいったいどのように交差し、どのように私たちの人生にかかわり合っているのでしょうか。

借家での祈り

いま私は、143年前の同志社創立の記念すべき日の朝、新島のやさしく、涙にみちたまじめな祈りは自宅でささげられたと申しました。しかもそれは日本という異教社会において同志社が神にささげられた瞬間であったとも申しました。けれども、ことはそれほど単純であったわけではありません。じつはそのとき新島は自宅とは言え、借家に住まっていたからです。このときの祈りが借家でささげられたのか、持ち家でささげられたものであったのか、いまの私たちにはあまり大きな問題だとはおもえません。けれども、新島には違いました。新島にはこの借家住まいであることについて、大きな心配があったからです。新島はアメリカの恩人ハーディー夫人に宛てた手紙のなかで、こう書いています。

日本では借家住まいをしている限り、多くのことはできません。家主には借家人の行動が気に入らなければ、いつでも私たちを追い出す権限があるからです。(中略)新しい学校の建物の入手にただちにとりかかるのが最善の道だと私は確信しています。そうすれば、私はその家の一部に自分の名前を書いた表札を掲げ、政府と人びとにこれは私の家であり、自分の家ではキリスト教を教えることができるのだ、と言えます。自分の持ち家にいる限り、京都府当局は私を立ち退かせることはできません。京都で借家に住むのは非常に弱みになります(「ハーディー夫人宛(一八七五(明治8)年11月23日)」同志社編 『新島襄の手紙』 岩波書店 2005年 122～123頁)。

というのです。

それは、同志社創立となる官許同志社英学校開校のわずかに6日前、1875年11月23日に書かれた手紙でした。それから143年後のきょう、私は一言で同志社は異教社会において神にささげられた学校であったと申しました。けれども、この手紙は異教社会のなかに誕生した同志社が抱えていた困難の一端を伝えていたのです。

新島が借家ではなく、持ち家に拘ったのは、もちろん生活の安定や蓄財といった利己目的のためではありません。その理由はただひとつ。「自分の家では(持ち家ならば、さまざまな反対や干渉を受けずに)キリスト教を教えることができる」と考えたからでした。借家住まいの新島は、創立したばかりの学校が、キリスト教という理念を抱えたために、ぎゃくに異教社会にのみ込まれてしまうかもしれないという危機を自覚していました。事実、ハーディー夫人に宛てた同じ手紙のなかで、新島はその前日に京都府庁に呼び出されて、カリキュラムのなかから聖書を除外するようにとの要請を受けたことを伝えているのです。

すべての者の祈り

ところで、いまご紹介したデイヴィスの記録には、このとき「すべての者が心から祈った」と報告されていました。この祈りがひとりひとり声に出して祈ったものなのか、すべてのひとが心のなかで、新島の祈りに強く共感したという意味なのかはわかりません。しかし、私はこの「すべての者が心から祈った」という証言はとても重要であると考えています。声に出したのか、心のなかで祈ったのかはともかく、同席したデイヴィスも、そして6名の生徒たちも、その全員が、新島が直面していた困難と苦境とを共有していたと推測できるからです。

いつ家主に追い出され、また政府や人びとにキリスト教を禁じられる事態に追い込まれるのかわからない新島が背負っていた危機を、デイヴィスと最初の生徒たちはともに背負っていたということになります。このように推測を重ねてみると、創立記念日を間近にした私たちが考えるべきことも明らかになってまいります。それは、あの日から143年を隔てて、私たちがいったいどのようにこのときの新島の祈りをともにすることができるのか、そのことを考えてみることではないかとおもうのです。

明日を語った湯浅八郎

143年前の新島の苦勞と祈りを、現代の私たちがどのように受け継ぎ課題とするのか、あの朝のデイヴィスと生徒たちのように、私たちもまたその祈りに加わるにはどうしたらいいのかと考える前に、きょう私は異教社会でささげられた同志社という学校のゆえに、新島と同じように苦しまなければならなかったひとりの教育者についても触れておきたいとおもいます。

東京・三鷹にある国際基督教大学・ICUはリベラル・アーツ教育を標榜する、その名のとおりキリスト教を建学の精神とする大学としてよく知られています。戦後1953年に開学されました。初代学長は同志社で戦前と戦後、二度にわたって総長を務められた湯浅八郎という先生でした。できたばかりのICUで、湯浅学長の口癖は“ICU is tomorrow’s University!”(ICUは明日の大学・未来の大学だ)というものであったと言います。当時、それを聞いた学生代表のひとりが、学長に直接「ICUが明日の大学だということはわかりました。でも先生が言う明日はいついつくるのですか」と抗議の意味も込めて聞き返したというエピソードを、昔、何かで読んだか耳にしたことがあります。湯浅学長は、まだできたばかりで施設面でもカリキュラム面でもこれから整備していかなければならない大学の責任者として、学生たちには目を未来に向けて欲しいと願われたのかかもしれません。

けれどもその当時、人生の貴重な4年間でICUで学んでいた学生たちにとって、その明日という未来の時間は彼らが在学している間に確実にやってくるものでなくてはなりませんでした。

湯浅学長は、戦前の国家主義、軍国主義的な傾向を強めた時代に、同志社のキリスト教教育を守ろうとして、ひとたびは総長辞任にまで追い込まれた経験をおもちの教育者でした。総長辞任は1937年、その数年後、1941年には太平洋戦争が始まっています。湯浅が同志社総長を辞任しなければならなかった時代を、教え子のひとりであり、のちにICUで同僚として教鞭を執った日本思想史の武田清子さんは、

近代日本の暗い谷間の時期に、同志社の総長となった湯浅八郎が、リベラルな思想の故に、超国家主義、日本的ファシズムの暴虐な圧力と攻撃を受け、(中略)大学内外の右翼、軍国主義者たちによって「国賊」よばわりをされ、総長の座を追われた。これはまさに受難の時代であった(武田清子 『湯浅八郎と二十世紀』 教文館 2005年 9～10頁)。

と回顧しています。さらに武田は、その受難の時代にあって、湯浅を同志社から追い出した人たちのことを湯浅が次のように語ったことは忘れられないとして、そのときの言葉も記録しています。それは、

彼らは私を理解してくれなかった。しかし、私は彼らを理解する者でありたいと考えている(同書 67頁)。

というものでした。理解しない者を理解したい、とする恩師の生き方に強烈な印象を受けた武田は、さらに

そこには、怨恨も反感も全然感じられなかった。私は私の信念に基づいて最善を尽くした。それが彼らには受け入れられなかったから総長の座を下りたのである。あとは神さまのお裁きにゆだねるだけだ—という、すっきりとした姿であった。人間には悪魔のような面と神のような面とがある。その神のような面を大切に、し、かけがえのない宝として尊重しなければならないと語った。これは、この時だけでなく、彼が常に説いたことであった（同書 同頁）。

と解説しています。総長を追われたとき、湯浅は47歳でありました。湯浅がどんな教育者であったかはご想像いただけるとおもいます。湯浅もまた、日本という異教社会のなかで苦しんだ同志社人であったのです。戦後の自由な空気の中で、再び総長に復帰されたとはいえ、多くの苦労を背負われた総長でした。その経験をおもえば、ＩＣＵの責任者になってからの湯浅の言葉は、たんなる責任の回避や言い逃れであったとはおもえません。むしろ、日本社会全体がひとつの価値観に支配されていた時代に、何よりも個人の自由を尊ぶキリスト教主義教育を建学の精神としてきた同志社という学校の責任者であったからこそ、できたばかりの新しい大学では、若い人びとの目線を確実に明日への希望に向けてやりたいと願った結果であったのではないかとおもいます。

湯浅八郎という優れた教育者もまた、時代こそ違え、新島とおなじように、あるいは新島とともに異教社会のなかで、苦勞をし、異教社会のなかであの朝の祈りを受け継いだひとりでありました。

宝と真珠

湯浅が受け継いだ祈りのバトンを、私たちはどのように受け継ぐことができるでしょうか。
さきほどお読みいただきました聖書の箇所をヒントにして考えてみたいとおもいます。ここにはイエスが「天国」にたとえたふたつの物について書かれています。
ひとつは煙に隠された宝です。そしてもうひとつは良い真珠でした。天国は、隠された宝や、良い真珠にも匹敵するほどすばらしいもので価値あるものだ、という意味でしょうか。そう考えると、天国はたいそう高価なもので、それはなかなか手に入りにくいものだから、それを努力して手に入れなさい、というわかりやすい人生の教訓が書かれているように読めてきます。

しかし、その目標は簡単に達成されません。宝は煙に隠されていて、高価な真珠は商人が探していたものでした。宝も真珠もまずは見つけなければなりません。宝がどれほど広い煙に隠されているのか、しかもその広い煙のいったいどこに隠されているのか、そもそもその煙がどこにあるのかさえも皆目見当もつきません。また、古代社会の商人がそう簡単に高価な真珠に巡りあえることも現実的ではありません。宝は広い煙のなかから、そして真珠だっどこにあるのか、どこかのキャラバンが持ち運んでいる最中なのか、まったく暗示も手がかりもないのです。どうも単純な人生訓ではなさそうです。

発見の喜び

新それにもかかわらず、煙に隠された宝を見つけたひとにも、高価な真珠を探していた商人にも共通していることがあります。彼らはそれぞれ、宝と真珠を見つけたのでした。それが偶然であるなしかかわらず、彼らの喜びがどんなに大きなものであったのかを想像するには、この「見つける」という言葉が、古代ギリシアの科学者アルキメデスが、よく知られた物理の原理を発見したその瞬間に、「見つけた」「わかった」と、この聖書の言葉と同じ言葉を叫んで、裸のまま街に飛び出したという伝説を思い出してみるといいかもしれません。

煙に隠された宝を見つけたひとは、「そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その煙を買う」と書かれています。このひとはそれを確実に自分のものにするために、宝を隠したままにして、しかし、その発見のうれしさのあまり、喜びながら持ち物をすっかり売り払ってしまいました。そして、高価な真珠を見つけたひとはどうでしょうか。高価な真珠とはいえ、かれが見つけたのはたったひとつの真珠でした。原文の聖書では、探していた真珠は複数形で、しかし、見つかった真珠は単数形で書かれています。

そして、このひとも「出かけて行って、（このたったひとつの真珠のために）持ち物をすっかり売り払い、それを買う」というのです。この商人には「喜びながら」とか「うれしさのあまり」といった副詞的修飾は添えられていませんが、「出かけて行った」という動作のなかに、かれの喜びを想像することができます。

探していたものを「見つけた」大きな喜びのほかに、ふたりに共通していることは何でしょうか。それは宝や煙、そして高価な真珠ではありません。ふたりに共通していることは、「持ち物をすっかり売り払った」ことにありました。厳密には、煙に隠された宝を見つけたひとは現在形で、高価な真珠を見つけたひとは完了形で書かれていますけれども、ふたりとも持っているすべてを宝に、そして真珠に交換したということになります。

価値観の転換こそ

私はそこに、天国の秘密が隠されているような気がいたします。持ち物のすべてを隠されていた物、探していた物と交換するということ。ここでは、宝や真珠そのものではなく、その価値の交換、あるいは転換こそが本来の宝であり、真珠であると喩えられているのです。彼らがすっかり売り払った持ち物とは、こんにちの私たちの状況に置き換えて考えてみれば、いまのこの私自身を証明してくれるもの、アイデンティティと言ってもいいかもしれません。いえそれは、同志社の学生であるとか教職員であるといった、いわゆる身分の証明に留まりません。それらは私たちのごく一部でしかありません。持ち物をすっかり売り払うという価値の転換には、いま私たちが抱えている、喜び、夢、希望、悲しみも、困難も、叫びも、訴えも、コンプレックスも、優越感も、誇らしい気持ちも、悔しさも、逃げたい気持ちも、だれかを支配したいという欲望も、この私自身にまわりつくあらゆる感情を新しく発見し、新しく見つけたものと置き換える、転換するという意味が込められているのです。

私たちは、学生時代に、そして人生のなかで、あるいは新島がデヴィスと6名の生徒たちとともに「やさしい、涙にみちた、まじめな祈り」から始めたこの大学のキャンパスで、その価値の転換をどのように果たすことができるでしょうか。

自転車の荷台の上

日本人最初の国際アンデルセン賞の受賞者となり、2014年に104歳で亡くなられるまで現役の詩人であったまど・みちおさんに「赤ちゃん」という題の詩があります。まどさんが70代半ばの頃の作品です。短い詩です。読んでみます。

赤ちゃん
何がうれしいのでしょう／赤ちゃんが／声たてて 笑っています／あんなに手足を ばたつかせながら
まるで大昔の／神さまの赤ちゃんが／お日さま だきかかえて／わはわは 笑っているみたいです／はだかんぼうで ねっころがって／まできたての 山や川といっしょに・・・
とても思えません そこ／排気ガスとスモッグの街のまん中で／ごうごう ごうごうの 自動車洪水に／よろよろ よたよた 流されていく／お母さんの自転車の／うしろの小さな荷台の上だとは・・・（『まど・みちお全詩集』 理論社 1992年）

発見する、あるいは発見の喜びとはこういうことなのかもしれません。何がうれしいのか、赤ちゃんが笑い、手足をばたつかせている姿を見ていると自然と笑みがこぼれます。
まどさんは、そんな赤ちゃんを見つめながら、神さまがこの世界を作られた頃、その想像することでもできないような太古の昔に、赤ちゃんがお日さまを抱きかかえているような錯覚にとらわれているのです。赤ちゃんも、山や川もできたてです。そこには世界の本来の姿という意味が込められているのでしょうか。そのはだかんぼうでねっころがっている赤ちゃん、つまり、自分を守ろうともしないで、無防備にすべてを受け入れている赤ちゃんを、よく見れば、排気ガスとスモッグがかかる都会のまんなかで、渋滞する自動車の洪水によって押し流されるようにして、隅っこに追いやられてしまい、危なっかしいお母さんの自転車の、その荷台の上にいるというのです。
この詩を読んでもと、神さまが与えてくださった赤ちゃんのいのちに申しわけないような気持ちになりませんか。お日さまだって抱きかかえてしまうほどの天真爛漫に、すべてを受け入れ、すべてを信頼して「わはわは」と笑っている幼いいのちは、都会のまんなかで排気ガスとスモッグにまみれて、道路の隅っこに追いやられたママチャリの荷台の上になにか、いる場所をもたないのです。
でも、いっぽうでそんな大都会の片隅にだって、赤ちゃんのいのちは見つけることができるのです。まどさんは、そのいのちを見つめてこの詩を書きました。この詩を書き終えたとき、まどさんにとって世界はそれまでとはまったく違う世界であったに相違ありません。

バトンを受け継ぐ

私たちは残念ながら、143年前に戻って、11月29日の朝の祈りを創立者とともにすることはできません。けれども、このまど・みちおさんの「やさしくて、愛にみちて、まじめな」詩と出会ったとき、私たちは、大都会のまんなかで、排気ガスとスモッグにまみれた道路の片隅におかれたお母さんの、自転車の荷台の上で、危険にさらされながら、小さな声をあげている幼いいのちを守りたい、いえ守らなければならないという気持ち、いつの間にか自分の心のなかにも芽生えていることを知って、ほっと安心し、うれしい気持ちになることができます。
借家というリスクのなかでさざげられた新島の祈り、そして、国家主義から超国家主義へと傾斜していく時代の同志社にあって、自分を追い出した人びとを理解すべきだと考えた湯浅総長、それぞれに、さながらいまにも倒れてしまいかねない危険な自転車の荷台におかれた赤ちゃんのようにありました。大きな危険のなかで、しかし、確かないのちの叫び声をあげた人びとでした。
創立記念日を憶えて集まったこの火曜礼拝の夕べ、私はみなさんとともに143年前の朝の、創立者の祈りに思いを寄せながら、私たちもまた、これまで自分が大切にしてきたものや自分を守ってくれるものではなく、それらを手放して、危機にさらされている人びと、そして、私たちと立場や考えを異にする人びとにこそ、目を向け、誠実に向き合って生きる者でありたいと

願うものであります。そして、創立者から多くの人びとを経て受け継いだこのバトンを、大切に次の世代に手渡せる者でありたいところから願っております。

2018年11月20日 今出川火曜チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録